

二の丸御殿の概要

二の丸の立地、現況、沿革

初期の金沢城は本丸を中心とした城作りが行われていたが、寛永8年(1631)の大火を機に中心は二の丸に移った。敷地を拡張し大規模な御殿が作られ、以後、藩主の住まいや政務の場として金沢城の中核を占めた。

約2ヘクタールを超える敷地に建てられた二の丸御殿は、藩主の交代による改修や火災による焼失など幾度となく姿を変えながらも幕末・維新期まで御殿としての機能を持ち続けていた。その後、陸軍の兵舎として利用されたが、明治14年(1881)の失火により焼失した。

現在金沢城内に二の丸御殿の名残は見られないが、御殿の正面玄関脇にあった唐門と奥能舞台は城外に移築され、現在は尾山神社の東神門、中村神社の拝殿(国登録有形文化財建造物)となっている。

後期の二の丸御殿の構成

表向、御居間廻り、奥向で構成される。

表向は、城内儀礼や藩士たちの公務の場であり、下記の部屋などから成る。

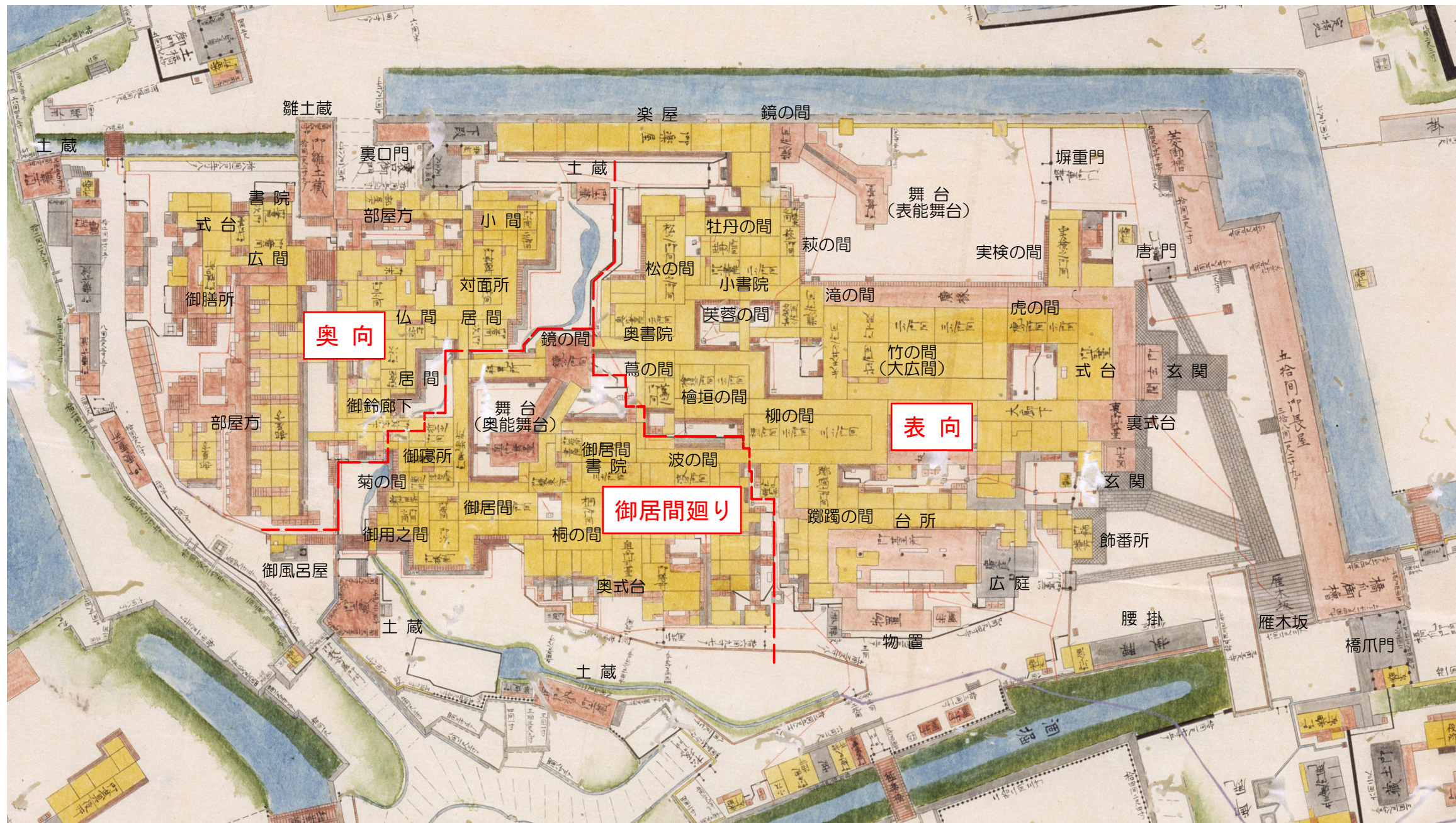
玄関、表式台、裏式台、虎の間、実検の間、竹の間(大広間)、瀧の間、小書院、芙蓉の間、萩の間、牡丹の間、松の間、奥書院、柳の間、檜垣の間、蔦の間、能舞台、鏡の間、躑躅の間、台所、飾番所、唐門
御居間廻りは、藩主の日常の生活空間で、下記の部屋などから成る。

奥式台、桐の間、御居間書院、波の間、御居間、菊の間、御用之間、御寝所、能舞台、御風呂屋
奥向は、藩主の母や側室、子女の生活空間(広式)であるとともに、そこに働く女性たちが居住する場でもあった。御居間廻りとは御鈴廊下でつながり、藩主以外の男子の出入が厳重に制限された。下記の部屋などから成る。

対面所、居間、小間、仏間、居間、御鈴廊下、式台、広間、書院、部屋方、御膳所

資料の時代区分

二の丸御殿は寛永8年(1631)の大火後に建築され、宝暦9年(1759)の大火、文化5年(1808)の火災で焼失して再建されている。寛永の大火後の建設から宝暦の大火までを前期、宝暦の大火後の再建から文化の火災までを中期、文化の火災後の再建から明治の火災で二の丸御殿が焼失するまでを後期とした。絵図(平面)については金沢城調査研究所の研究成果に基づき後期を更に5期に区分した。



「御城中巻分基絵図」二の丸御殿廻り(横山隆昭氏所蔵)

二の丸主要年表

区分	年号	西暦	事項
前期	寛永8	1631	二の丸に御殿が新たに造営される「上梶家文書<寛永一二年御公儀従郡中江御取替指引帳>」(県図写真帳)、「加藩国初遺文<酒井忠世他3名連署状>」(玉図加越能文庫)他
	寛永15	1638	二の丸の脇に数寄屋を設ける「御歴代御書写」(加越能文庫)
	万治3	1660	二の丸御殿の作事が行われる「御横目書付留帳」(加越能文庫)
	貞享3	1686	5代藩主前田綱紀、金沢城の「御新宅」を修理するよう命じる「前田貞親手記」(加越能文庫)
	元禄9	1696	二の丸御殿の普請が行われる「菅君雑録」(加越能文庫)他
	享保12	1727	二の丸御殿の御居間廻りの作事が行われる「中川長定覚書」(加越能文庫)他
中期	宝暦9	1759	宝暦の大火により二の丸御殿も焼失「宝暦九年金沢火事之一巻」(『加賀藩史料』第8編)他
	宝暦11	1761	二の丸御殿の再建に着手する「筒井旧記<本保十太夫他連署状>」(加越能文庫)他
	宝暦13	1763	10代藩主前田重教、再建なった二の丸御殿に入る「政隣記<村井又兵衛書状>」(加越能文庫)他
	安永2	1773	二の丸御殿の大式台・虎之間等に着手する「頭書日記」(『加賀藩史料』第8編)他
	天明8	1788	二の丸広式の修理が行われる「文化焼失以前二の丸之図」(加越能文庫)
後期	1	文化5	二の丸御殿焼失(文化の火災)「政隣記」(加越能文庫)他
		文化7	二の丸御殿の造営完了する「御造営方日並記」(加越能文庫)他
	2	文政元	御寝所・御居間の改変が行われる「清水又十郎相統以来二之丸造営其他主付御用の時拝領目録」(玉図清水文庫)
		文政3	勝千代(のちの13代藩主前田斉泰)、二の丸の御居間書院に移る「官私随筆」(加越能文庫、玉図奥村文庫)「斉広様御伝略等之内書抜」(他)
	3	弘化4	松之間の普請が成就し、斉泰の子、基五郎(のちの12代大聖寺藩主前田利義)、豊之丞(のちの13代大聖寺藩主前田利行)が移る「官事拙筆」(玉図奥村文庫)
	4	嘉永6	二の丸御殿の修築を行う「見聞袋群斗記草稿」(加越能文庫)
		安政元	真龍院が松ノ御殿(金谷出丸)から二の丸広式に移る「御用方手留」(奥村文庫)
	5	文久3	前田斉泰の正室溶姫、江戸より二の丸御殿の広式に移る(溶姫の住まいを「御守殿」と称する)「御用方手留」他
		明治元	御居間書院の建て接ぎが行われる「成瀬正居日記」(金附図)
		明治2	14代藩主前田慶寧、二の丸御殿から重臣本多邸に移る「見聞袋群斗記草稿」(加越能文庫)
	明治4	1871	廃藩置県につき、二の丸御殿は兵部省(のち陸軍省)の所管となる
	明治14	1881	旧二の丸御殿焼失 防衛省史料

絵図（平面）

御殿の平面を描いた絵図は全体で80点存在し、江戸前期の御殿を描いたものが13点、中期を描いたものが4点、後期を描いたものが63点確認され、豊富な平面絵図の存在が確認された。これらは平成29年（2017）に「金沢城史料叢書」として絵図集がとりまとめられているほか、平成31年に玉川図書館「加越能文庫」に所蔵される新たな絵図が確認されている。

これらの絵図の景観年代を整理することで、文化5年（1808）から明治5年（1872）に至るまでの間における建物の増改築や撤去に関わる変遷を整理し江戸後期の御殿を更に5期に分類した。

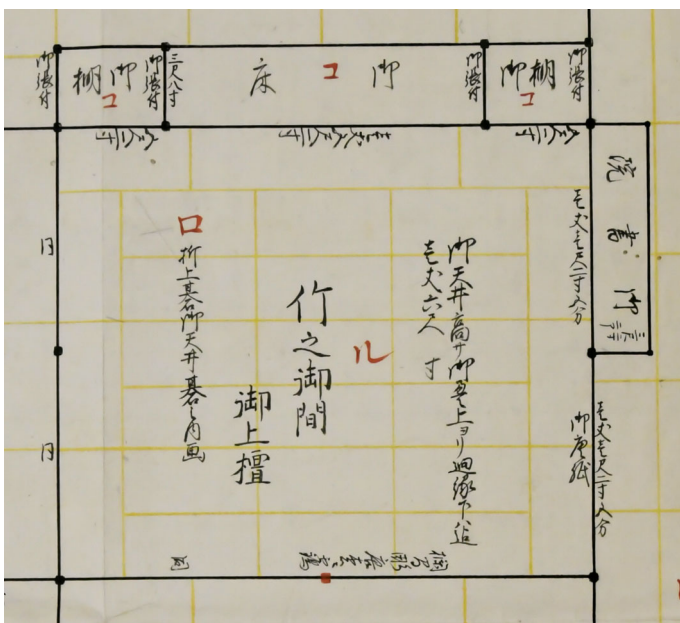
概観としては、政務や儀礼の場であった表向は江戸後期を通じて改変が少なく、一方で藩主や女性たちの居住の場であった御居間廻りや奥向は居住者の変化等に伴う改変が見られることが明らかとなった。

また、部分的ではあるが、記載されている数値から平面規模や天井高等を推測する手がかりが得られるほか、柱間装置や障壁画の絵師、画題が記載されている絵図も確認されている。



「金沢城二之御丸三歩碁図B」（石川県立図書館）

嘉永3～6年（1850～1853）における二の丸御殿全体を描いたとされる平面絵図。屋根伏を描いた貼紙も掛けられている。屋根形状や仕様を知るうえでも貴重な絵図である。

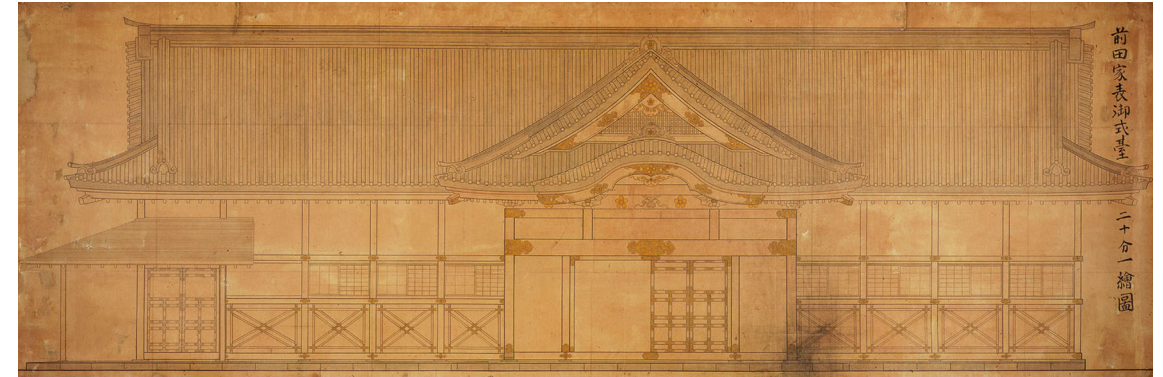


「二ノ御丸御殿建物指図」竹の間御上段抜粋（金沢市立玉川図書館）

文化7～8年（1810～1811）頃とされる平面絵図。柱間装置の種類、天井の形式、欄間彫刻の題材等、内装の仕様や、平面・高さに関する寸法が詳細に記載されている。

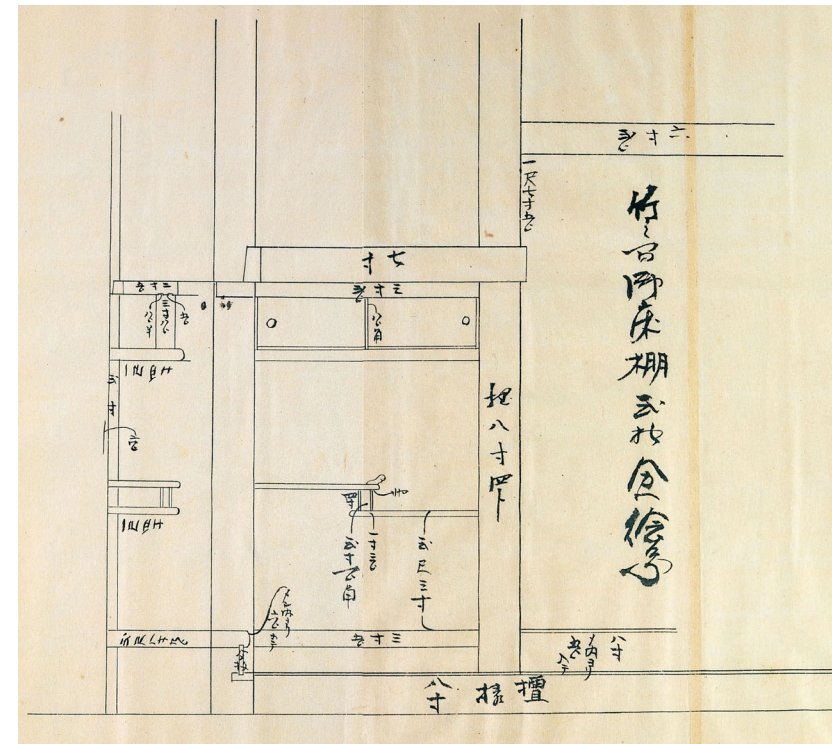
絵図（立面等）

御殿の表玄関を描いた外観の立面絵図や、御殿内部の棚や床の造りを描いた内装図が確認され、平面絵図からは得られない高さ方向の寸法や、外観及び内部の意匠を推測するうえで有力な史料となることが明らかとなった。

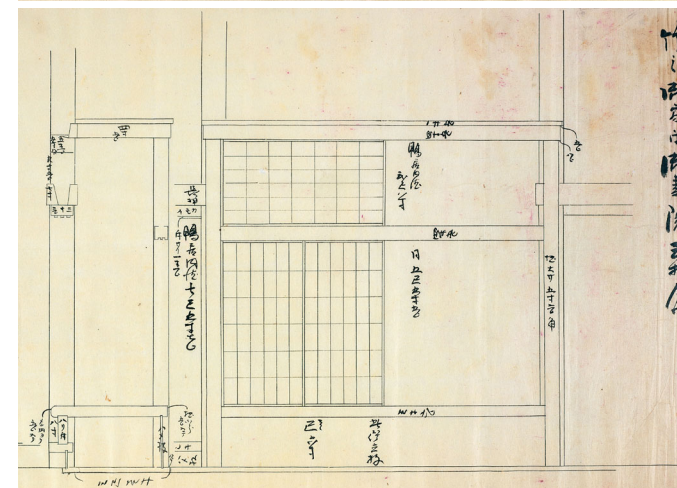


「金沢城二之丸御式台絵図」（金沢市立玉川図書館）

式台玄関の正面を描いたと考えられる絵図。外観意匠のほか、桁や棟の高さを推定するうえで重要な参考資料である。



竹の間上段 違い棚



竹の間上段 付書院

「二ノ丸御殿関連史料（竹の間・小書院内装図集）」抜粋（石川県立歴史博物館）

違棚や付書院などの姿を現した絵図。正面図と断面図を併記したものが多く、部材寸法なども詳細に記載されている。

発掘遺構

明治14年（1881）の御殿焼失から現在までの開発や土地利用の変化により、御殿の礎石や痕跡等の遺構は現地に露出していないが、金沢大学が昭和43年（1968）から昭和52年（1977）の間に発掘調査を実施しており、さらに県が土地を取得した後、平成9年（1997）から平成29年（2017）の間に部分的な調査を実施している。

これら既往の埋蔵文化財調査の内容から、御殿の遺構が地中に残存し、調査後に埋め戻されて現地に保存されていることを確認した。



昭和44年に行われた金沢大学・県教育委員会による発掘調査の様子

建築遺構

現在、金沢城内に御殿の建築遺構は見られないが、御殿の式台玄関脇にあった唐門と、奥能舞台が城外に移築され、それぞれ尾山神社の東神門、中村神社の拝殿（国登録有形文化財建造物）となっていることを確認した。

尾山神社東神門（旧二の丸御殿唐門）



正面全景



正面見上

中村神社拝殿（旧二の丸御殿奥能舞台）



正面全景

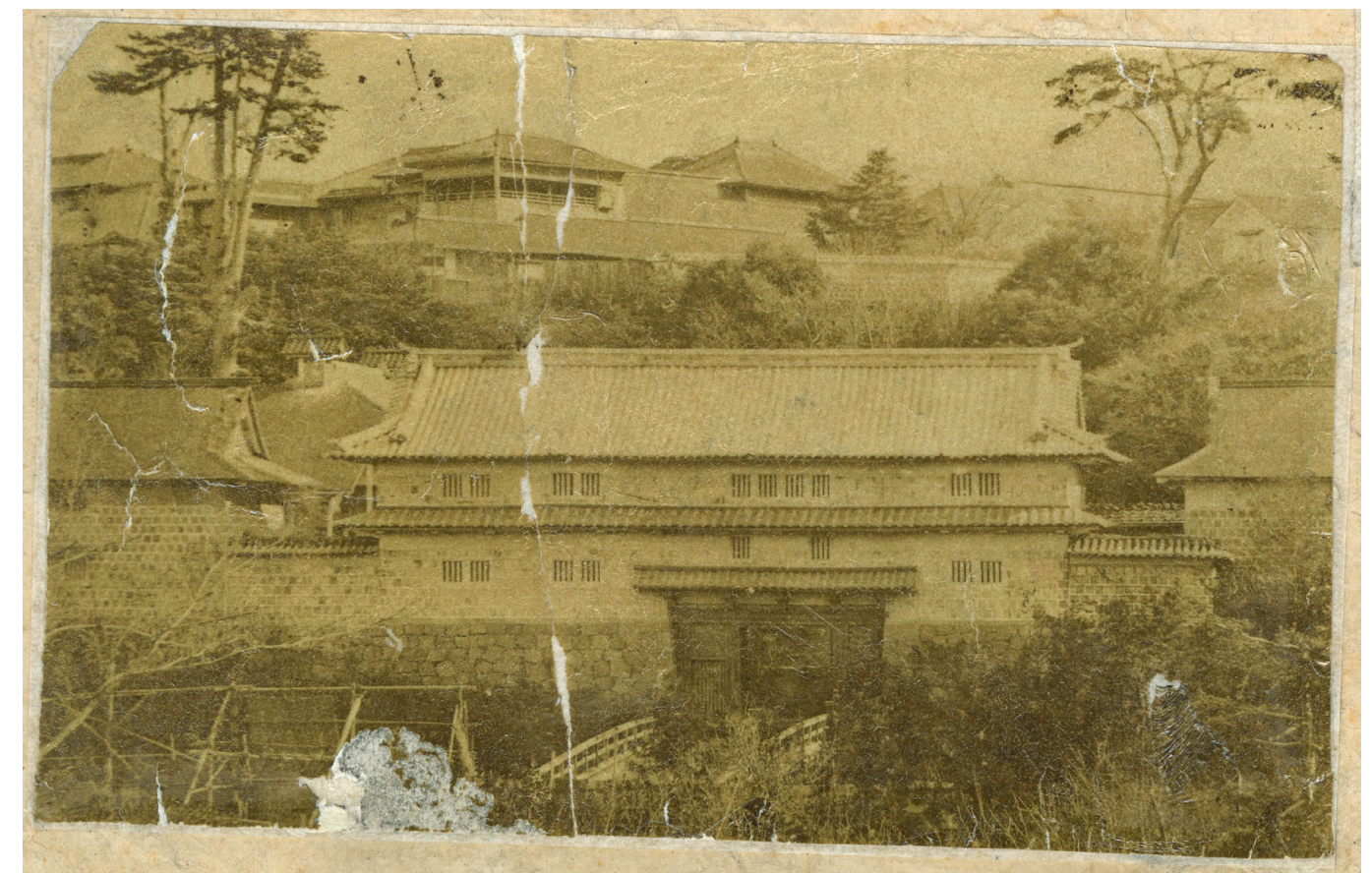


内部欄間及び天井見上

古写真

明治期に撮影された二の丸御殿が写されている古写真は、鼠多門側から撮影された2景と、三の丸から撮影された2景の計4景、複写した写真1点を加えて計5点が確認されている。

これらに写る建物を御殿平面図と比較し、写真に写る部分を特定した。これにより、御居間廻りの二階や建物の屋根を中心とした御殿の外観の一部が明らかになるとともに、御居間廻りや奥向においては、建設当初の絵図に描かれた御殿の形状と、明治期の写真に写る形状が一部異なることが確認された。



古写真「金沢城城門等写真 鼠多門」（金沢市立玉川図書館）

絵画

絵画資料は、二の丸御居間廻り・広式を描いた絵画資料が1点確認されている。



「二ノ御丸御広式御居間遠望図」(金沢市立玉川図書館)

障壁画・欄間等

障壁画の現物は確認されていないが、複数の絵図・文献から場所、画題、絵師に関する情報が得られることを確認した。

また、参考となる資料として、加賀藩御用絵師であった梅田家に伝わる粉本下絵が江戸前期から中期のものを中心に約4,100点が確認されている。

欄間については、建築遺構に残された欄間の題材が文献等に記載されるものと一致することを確認した。

文献

「御造営方日並記」(金沢市立玉川図書館)

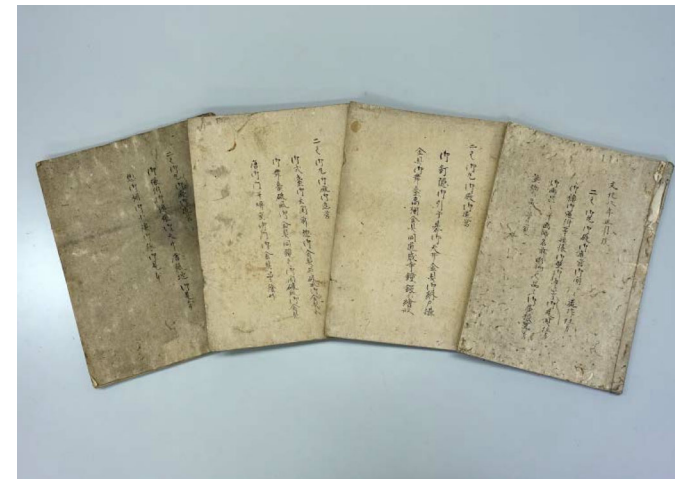
文化5年(1808)の火災で焼失した二の丸御殿の再建を担当した造営奉行高島厚定の日記である「御造営方日並記」(金沢市立玉川図書館所蔵)に、御殿の建物や内部意匠、造営に携わった職人等に関し詳細な記録が書かれている。

平成16年(2004)、同17年(2005)に「金沢城史料叢書1(上巻)、同2(下巻)」として翻刻されている。

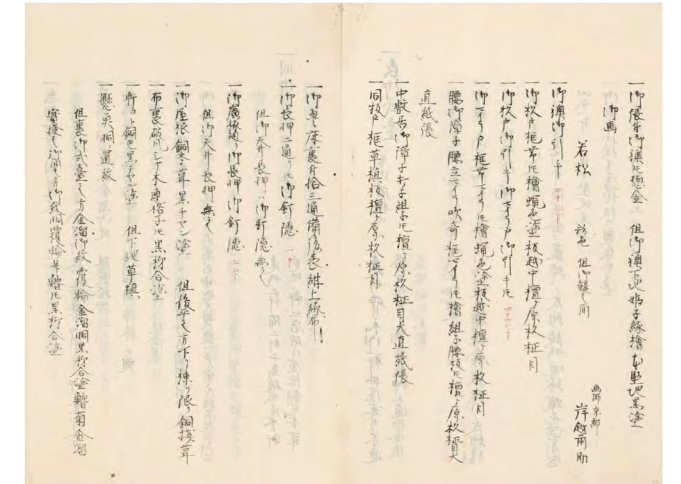


「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」(金沢市立玉川図書館)

平成31年に玉川図書館「加越能文庫」に所蔵される「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」が確認された。江戸後期の二の丸御殿再建に携わった御大工井上庄右衛門が御殿の再建直後の文化8年(1811)に造作仕様を記録したもので、内外装の仕様を詳細に記すと共に、唐紙等の見本や飾金具の図面を併記し、御殿の仕様や材料の詳細に関する情報が得られる。



計4冊からなる冊子



仕様が記載された部分

張付・襖や天井の唐紙他の種類と使用位置の一覧、模様唐紙の実物見本、床脇の小襖縁布の実物見本を収録する。



【実物見本】唐紙



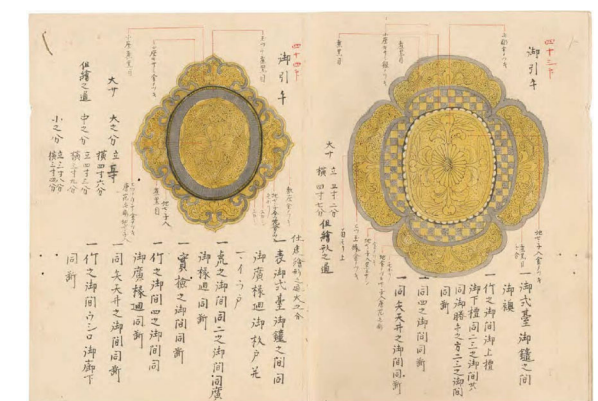
【実物見本】棚小襖の縁布

御殿に取り付けた飾金具の絵形を収録する。

絵形は色彩も含めて写實的に描写し、使用場所・寸法・各部の制作技法を付記する。



【絵形】飾金具(釘隠)



【絵形】飾金具(引手)